



BATAVIA course GLOBAL class

2019年度、バタビアコースに新しいクラスが誕生しました。



大谷中学・高等学校
校長
飯山 等

宇宙船地球号のわれら

「地球 the globe上に暮らす人々は皆一つの船に乗った仲間である」という認識、これが「globalグローバル」の意味。大谷がここに開く学びのかたちは、大谷が時代にふさわしくあるために、外から新しく付け加える何かではなく、時代が大谷に求め、大谷の本来性の発揮として、時代によって呼び覚まされ、新たに開かれる学びにほかなりません。

親鸞聖人滅後154年後に生まれて、日本歴史上、生きるのがもっとも艱難かんなんであった時代を生きた蓮如上人は、祖師の心根の肝要を、「仏法の讃嘆のとき、同行を《かたがた》と申すは平外なり。《御方々》と申してよき」と、《御》の一字にあると教えてくださっています（平外とは不作法、ふしつけの意味）。「同行」として、「かたがた」としての開けが、ときとして平準化の視界の開けの一方で、気づかないまま損なってしまっている自他への眼差し、関係の在り方、たいせつなその心根を祖師から汲み取り、「御」として広く開いてくださいました。仏法は「御かたがた」という場、関係性を開く。個々の存在の絶対性に頭を下げるというところに成り立っている平等心、平等性への気づきを通して新たに知らされる個の尊厳、かけがえのなさへの気づきの共感・共有こそ、わたしを、そして、わたしたちを成り立たせるもっとも確かな大地であると。

「respect」という語が大切なことばとしていつも私の胸に在ります。「respect」とは〈re-〉=〈振り返って〉+〈spect〉=〈見る〉と辞書にあります。ぞんざいな見切りで評価を下して、目を離してしまう。そのような私が、ふたたび振り返って見る。もう一度向き合ってよく見つめる。そこにあるもの、そうさせるものこそ、「尊敬」であると教えてくれたのです。辞書には類語として、「admire」「regard」「look up to」などを載せ、特に「respect」について、「たとえ同意できないとしても、その質の良さをすばらしいと認め敬意を払うこと、また、大切にされるべき意見・願望・権利などを重んじること」と説明されています。〈たとえ同意できないとしても、大切にされるべきこととして重んじる〉、深く考えさせられる指示です。「尊敬」が、単に〈その人の言動・業績の中に非凡な点のあることを認め、自他の模範に足る存在として仰ぎ見ること〉というだけであれば、それは平板な賞賛に終始してしまふ。「尊敬=respect」とはそうではなくて、自分の内面との闘いを通してはじめて成り立つことであり、自分が破られ、自身が従来の内から外に歩み出る。新たに育てられるということなのだを教えてくれたのです。

世界の垣根を低くするはずのグローバル化が、「私」と「彼」、「われら」と「かれら」とを分断する力になってはいませんか。せっかく出会いながら、交わるより先にそれを拒み、否定することによってしか自分を確立できないのだとすれば、「私」とは、「われら」とは、なんと哀しくさびしいものではないでしょうか。「自分ファースト」になってしまふ、そんな危うさを感じる今だからこそあなたに、大谷はグローバルクラスを開設します。